

90分のデス・エデュケーション授業が留学生に与える影響 — 自由記述の質的データ分析をもとに —

小山 真理*

The Impact of 90 Minutes of Death Education on Foreign Students' Sub-consciousness: A Qualitative Analysis

Mari Oyama

要 旨 筆者はデス・エデュケーションをライフワークと考えており、留学生対象の日本語の授業においても、ほぼ毎年、2年次の最後の時限に簡単なワークとともに紹介してきた。今回は、このたった90分の授業が、学生にどのような感情をもたらし、どのような反応や変化を生むかについて調査するため、ワーク後の自由記述を質的データ分析することにより探ることとした。まず、SCATの手法を用いて4つのステップからなるコーディングを行った。さらに、それを短冊状に切って並べ、同様の概念をグループ化し、M-GTAの分析ワークシートを作成した。その上で、SCQRMの理論に基づき、現象をコトバで言い換えて構造化し、モデルを構築して理論化した。そこから、この授業が学生の心情にどのような変化や影響を与えているかについて考察した。その結果、学生たちは留学による拘束からの解放願望を持ち、家族との時間を最も大切に考えていることが明らかになった。だが、それだけでなく、この授業を通して死生観について言及する者もあり、さまざまな感情が沸き起こって、改めて親への感謝や恩返しの気持ちを抱くなど、実に多岐にわたる気づきを得ていることが明確となった。また、その気づきや願望や死生観の多くは今後の後悔しない人生への決意や意欲へと向かっていた。以上のことから、たとえ90分だけのワークであっても、学生の内面に与える影響がいかに大きいかを確認することができた。

キーワード デス・エデュケーション 質的データ分析 SCATとSCQRM

1. はじめに

デス・エデュケーション (death education) を文字通りに訳すと、「死の教育」である。『生命倫理事典』(2002: 461) では「死を身近なものとして捉え、そのことにより、死によって浮き彫りにされる生の意義を探求し、自覚をもって自己と他者の死に向き合っていく姿勢を涵養する教育」とある。その歴史や日本での普及状況などについては、以前拙稿 (小山, 2010: 116) において述べたので割愛する。

初めてデス・エデュケーションを日本語の授業に取り入れたのは、筆者が文化外国語専門学校に勤務していた1994年のことで、当時はチームティーチングであったため、他の教員の協力を得て、研究授業の中で行った。その頃、「死」をテーマに授業を行うことはタブーであり、教員の中にも抵抗感を抱く者もいたが、死を忌み嫌うものとして捉えがちな日本人に比べ、留学生たちの反応はおおむね良好であった。『死を考える事典』(2007: 138) には、北米、その他の国に

*本学准教授 日本語教育

おける学校、大学の公式的なデス・エデュケーション科目のカリキュラムと教授法について述べられている項目があり、「デス・エデュケーション学科は、個人の感性を変えるよりも人の生き方を変えることにより影響を及ぼし、すべての体験的な学科では情緒的によい結果が見られるという」と書かれている。そのような影響や結果を、茫洋とではあるが筆者も感じていたため、1996年に大学に異動となってからも教材を練り直し、なるべく毎年、この授業を取り入れるように心がけてきた。

これまで、この授業の最後に書かせる自由記述は、学生が自身の振り返りに役立てばとの考えで行っていた。また、その記述から、デス・エデュケーション授業が学生の心情にどのような影響を与え、どのような反応を起しているかについて、漠然とした感覚で捉えていたが確信はなかった。そこで、この漠然とした感覚を質的データ分析によって明確にしたいと考えたのである。

2. デス・エデュケーション授業について

2-1. デス・エデュケーション授業の使用教材

2年次の最後に行う授業の概要は以前紹介した（小山，2010：117）が、ここではその詳細について述べておく。まず、授業の基盤となっているのは、1959年に来日し、デス・エデュケーションの普及活動を行ってきたアルフォンス・デーケン（Alfons Deeken）の「死への準備教育」である。この訳語はデーケンによるもので、「人間は死ぬ瞬間までは生命ある存在である。自分に与えられた死までの時間をどう生きるかと考えるための教育という意味」でつけたとしている（デーケン，2001：3）。教材を作成するにあたり参考にしたのは、NHKの「人間大学」という番組の中で使われた『死とどう向き合うか』（1993年放送）というテキストである。このテキストは1996年に同名で書籍化されている。以下が、その目次である。

死生学のすすめ

- | | |
|---------------------------------|------------------------------|
| 第1回 死を見つめる | 第2回 悲嘆のプロセスのなかで |
| 第3回 伴侶を喪う前に ^{うしな} | 第4回 死への恐怖を乗り越える |
| 第5回 自分自身の死を全うする ^{まっとう} | 第6回 さまざまな死に学ぶ |
| 第7回 「死」についての生涯教育（1）～幼児から青少年のために | |
| 第8回 「死」についての生涯教育（2）～大学生・中高年に向けて | |
| 第9回 今、世界のホスピスでは | 第10回 日本のターミナル・ケア |
| 第11回 死とユーモア | 第12回 死にまざる ^{いのち} 生命 |

この中の、『死生学のすすめ』と『死を見つめる』の部分参考に速読の読解教材（資料1）を作成し、導入に使用した。また、学生のレベルや反応により使用しないこともあるが、読解の前に日本人を対象に行われた「死」についての雑誌アンケート（『CREA』，1994）をもとに作成した聴解教材（資料2）を利用することもある。その後、「私の人生計画表」（資料3）を用い、それを書き上げたのちに、「余命半年だったら」という仮定のもと、したいことなどを書き出すシート（資料4）を用意した。これはテキストの『「死」についての生涯教育（2）～大学生・中高年に向けて』を参考に作成した。そして、最後に今回の分析対象である自由記述の用紙（資料5）

を配り、感じたことなどを自由に書いてもらった。

2-2. 授業の流れと各教材の目的

まず最初は、イントロダクションとして「死」についてどう思うか、家族や友人と話したことがあるかなどを全体に問いかけ、この90分は死について考えてもらうことを告げる。そして、死に関する書籍を提示したり、事件事故や自然災害によって突然命を奪われた例を挙げたりしながら、死というものについて考えさせる。さらに聴解教材を用いるが、そこでは日本人が死をどう捉えているか、その死生観を概観するのが目的である。タスクシートには左側に空欄が用意されており（資料2）、それはテープを聴く前に、タスクの①～④の質問事項について、学生の考えを書かせるためのスペースである。レベルや時間の都合によっては口頭で全体に問いかけ、また、タスク自体を使用しない場合は、①～④の項目をもとに支障のない範囲でペアまたはグループで話し合わせることもあるが、全く触れずに省略してしまうこともある。資料2では①だけを詳しく載せたが、実際は全体がB4サイズの大きなタスクシートとなるため、レベルによって一項目ずつ区切りながら、または途中でテープを止めずに全体を聞かせた上で、答えさせるようにしている。ただし、今回対象とした授業では聴解教材を用いず、口頭でタスクの項目について全体に問いかける方法をとった。そして、読解教材（資料1）を用いて、学生が初めて聞くであろう「死への準備教育」という言葉を紹介し、さらに、この教育が必要とされる今日の状況について説明する。また、「死への準備教育」は「死ぬ準備」ではなく、「よりよく生きるための教育（ライフ・エデュケーション）」であることも確認しておく。

これらの基本的知識を導入した後、「私の人生計画表」（資料3）を考えさせるが、人間大学のテキストでは、大学生の演習授業の中で、「もしあと半年の命しかなかったら、残された時間をどのように過ごすか」というテーマで小論文を書かせるとある（デーケン、1993:73）。もちろん、これでも心を落ち着けてじっくり取り組めば、生と死について深く考えることはできるであろう。しかし、死ぬのはまだ先のことと考えている若い学生たちが、余命半年という仮定を与えられても、なかなかその気持ちになって書くのは難しい。そこで、まず「私の人生計画表」を立てさせ、まだまだ先のある輝かしい未来の自分の姿を想像させる。その際、できるできないは別として、これから自分がどんな人生を歩みたいか、どのような人生設計をしていくつもりかを書くように指示し、夢を膨らませられるよう心がけた。すると、学生たちは何の疑いもなく、自分は何歳まで生き、どのような人生を歩むかを頭に描きながら黙々と取り組むのだが、その作業が最も肝要であると筆者は考えている。その後、「もしあなたがあと半年の命だったら」という命題を与えることによって、今、描いた夢や将来が不可能となる状況に、多少なりとも実感を伴って身を置くことができるからである。この非現実的な状況に身を置くということで、学生は自己の内面と徐々に向き合っていく。ただし、余命半年という条件を与える際、体は自由に動き、寝たきりではないということを明示しなくてはならない。その上で、資料4にあるような質問に答えさせるが、皆の前で発表させたりはせず、回収して教師がチェックすることもしない。そのことも先に伝えておく必要がある。それを怠ると、思ったことを素直に書けなくなってしまう可能性がある

からだ。また、日本語で書くことに抵抗がある、あるいは、日本語の習熟度によりうまく説明できないという学生がいる場合は、母語での記述も認めている。

最後に、資料5を配布し、授業を通して感じたこと、思ったことを書いてもらい提出させる。この際、無記名でよいこと、成績には関係がないことを告げる。記名させると学生が自由に記述できなくなる恐れがあるためである。ちなみに人間大学のテキストでは、演習授業の第二段階として「別れの手紙」を書かせている。これは、遺される人に対して書くもので、「自分の親しい人に最後のあいさつとして何を語るべきかをじっくり考えさせること」（デーケン、1993：73）を目的としている。この提示でも、自由記述と同じような結果が得られるであろうが、対象が「遺される人」に限られているため、その人に向けた、より私的で感情的な表現になると考えられた。筆者はあくまでも、90分のデス・エデュケーション授業全体のワークが、学生にどのような感情をもたらし、どのような反応や変化を生むかを知りたかったため、この方法は用いなかった。

3. 対象学生と実施日

対象学生は、造形学部所属の2年次生で、2010年度日本語ⅡAの受講者14名と2011年度日本語ⅡBの受講者10名の計24名である。SCATとSCQRMによる質的データ分析は初めてだったため、今回は少人数のデータにとどめた。また、この自由記述を研究に使用すること、個人が特定されないよう配慮する旨を一人ひとりに確認の上、承諾を得た。実施日は、2010年度は2011年1月17日、2011年度は2012年1月13日である。

4. SCATとSCQRMについて

SCATとはSteps for Coding and Theorizationの略であり、一つだけのケーススタディやアンケートの自由記述欄など、小規模データにも適用可能な質的データの分析手法である。この手法を開発した大谷は、その概要を以下のように説明している（大谷、2008a：27）。

この手法では、観察記録や面接記録などの言語データをセグメント化し、そのそれぞれに、〈1〉データの中の注目すべき語句、〈2〉それを言いかえるためのデータ外の語句、〈3〉それを説明するための語句、〈4〉そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考案して付していく4ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリー・ラインと理論を記述する手続きとからなる分析手法である。

SCATは特定の学派の手法に基づくものではないが、質的分析方法の代表である「グラウンデッド・セオリー（Grounded Theory）」に多くを学んでいるとしている（大谷、2008a：29）。なお、この手法を実施するに際しての注意点などは、大谷のWebサイトSCATのページ（最終修正2012.12.9）に詳しい。

また、SCQRMとはStructure-Construction Qualitative Research Methodを略したもので、構造構成的質的研究法を指している。その理論の基盤は「構造構成主義」で、これを体系化したのは西條剛央である。構造構成主義の中核は「関心相関性」、つまり「存在や意味や価値といったも

のは、すべて身体や欲望、関心、目的といったものと相関的に規定される」(西條, 2007:5) というもので、すべては関心に応じて選んでいけばよいという「関心相関的選択」という選択原理を持つ。その原理に基づき、まず現象を適切に言い当てた「コトバ」にし、「コトバ」と「コトバ」の関係を考える。そして、「特定のコトバ(事象)」を「他のコトバとコトバの関係形式」である「構造」へと変換していくというものである。質的研究法にはいろいろあるが、SCQRMでは木下康仁(2003)がグラウンデッド・セオリーに修正を加えた修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach:以下、M-GTAと略す)を採用しており、その分析ワークシートをもとにして、最終的には対象とした事象を説明するモデルの構築を図る。なお、ここに至る手順については主に西條の著書(2007, 2008)を参考にした。

5. 分析の手順

まず、自由記述を内容に応じてセグメント化(今回は66セグメントに)し、SCATの手法を用いて質的データ分析を行った(資料6)。テキストとなる自由記述は、日本語の習熟度によって、文法的誤りが目立つものも多くあった。しかし、筆者の思い込みや誤解釈をなくすため、正しい日本語に書き直すことなくそのまま使用し、わかりにくい場合は前後文から言いたいことを判断する形をとった。SCATは初学者にも着ししやすいということで用いたが、今回の場合、記述の量に個人差があり、一人ひとりの記述についてストーリー・ラインを構成するには短すぎるものもあった。そこで、セグメント化したものを短冊状に切り分けて並べ替え、同じような概念でまとめたほうが、全体が俯瞰でき、共通項を見出しやすいと判断し、その手法をとることにした。これに似た方法は福士・名郷(2011)が試みているが、それは自由記述の回答者ごとに切り離れたものを、グループ化して並べ替えた分析となっている。また、開発者の大谷もSCATのWebサイトの中で、この手法は開発者自身も気づかなかった分析方法の一つであると賛同している。

上記のような経緯からSCATは分析の枠組みとして使用し、各セグメントを短冊状に切り分けて、4つめのコーディングで浮かび上がった「テーマ・構成概念」をもとに、似た概念を集めてグループ毎にまとめた。そして、各グループのまとまりを一つ概念として、SCQRMで採用しているM-GTAの分析ワークシートを作成した。このシートの項目は、「概念名」・「定義」・「ヴァリエーション(具体例)」・「理論的メモ」からなる(資料7)。また、分析ワークシート作成の際、1つのセグメントにいくつかの概念が含まれている場合は、ヴァリエーションを複数のシートに記入することになる。したがって、今回記入したヴァリエーション数は延べ91となった。さらに、これらの概念を包括する上位概念を【カテゴリー】として名をつけ、その上で、SCQRMの理論に基づいたモデルを構築して考察を行った。

6. 分析結果

手順に従って分析を行った結果、図のようなモデルが構築された。図に示したように、90分のデス・エデュケーション授業が留学生に与えた影響は、【願望】【死生観】【気づき】【決意や意欲】の4つのカテゴリーに分けることができた。

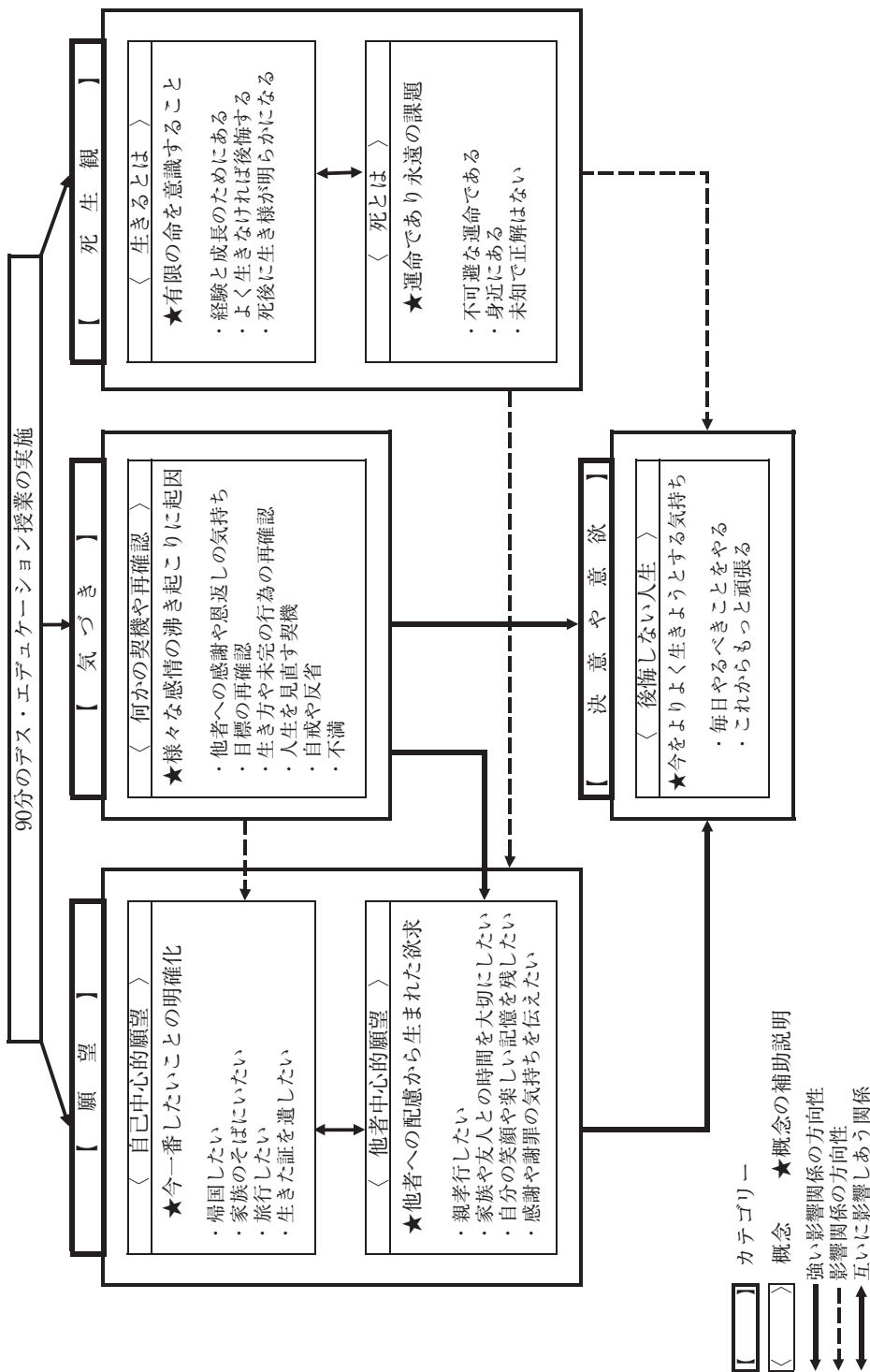


図 90分のデス・エデュケーション授業の影響モデル

最も記述の多かったカテゴリーは、【願望】で、〈自己中心的願望〉は19（以下、数値はヴァリエーション数を示す）、〈他者中心的願望〉は21であった。やはり余命半年という命題に引きずられた記述が多く、〈自己中心的願望〉の「帰国したい」「家族のそばにいたい」といった内容が圧倒的で、「今一番したいことが明確化」されていた。留学という特殊な状況に置かれている学生たちにとって、親元を離れていることがいかに不安であるか、また一人で寂しさや孤独と闘っている様子が読み取れる。一方、「旅行したい」は意外と少なく7であったが、余命半年という状況を深く考えず、ただ単に世界旅行をしたいというような短絡的な発想による記述も見られた。さらに、「生きた証を遺したい」は2にとどまり、自分の死後に何かを遺すことにエネルギーを注ぐより、留學生活によって現在阻まれていることを実現したいという「抑圧からの解放願望」欲求が強く出ていた。

〈自己中心的願望〉と〈他者中心的願望〉との線引きは難しく、どちらにも登場するヴァリエーションは8であったが、それは両者が相互に影響し合っているせいもある。いずれにせよ、ただ自分がこうしたいというだけではなく、家族や友人を思いやっているという「他者への配慮」を示した文脈のあるものは〈他者中心的願望〉にカテゴライズした。なかでも「両親の世話になっているが恩に答えていない」「両親祖父母は年を取ったので」「身近な人に自分の笑顔や楽しい記憶だけ残したい」といった、「親孝行」や「家族・友人への思いやりや労り」を表す記述が目立った。そこには家族を大切に、何よりも「家族や友人と過ごす時間を大切にしたい」と切望している様子が窺われる。これらの記述から、留學生活で親に迷惑をかけているという引け目意識も垣間見られ、精神的にも物理的にも支援してくれることに感謝し、その恩返しを第一に考えていることがわかった。なかには、「家族や友人に一番愛していると伝えたい」「大切な人にあやまりたい」といった具体的な感謝や謝罪の気持ちを伝えるという記述もあったが、これらは今すぐにもできることであり、それに気づいて行動に起こそうという姿勢が見られた。

次に【死生観】であるが、その記述は少なく、〈生きたとは〉は8、〈死とは〉は9のみであった。しかし、この内容には興味深いものが多く、宗教的思想に裏打ちされた発言は1つのみで、もともと自分が持っている死生観を改めて言語化したというものだった。そして、「生きているから経験と成長がある」「よく生きなければ後悔する」「死んだ後にその人の生き様が明らかになる」「人生は出会いと別れの繰り返しだ」といった記述からは、有限の命を意識することが根本にあって、そこから生きたとはどういうことかを定義している様子が窺えた。一方、死については「不可避な運命」で「身近にある」が「未知で正解のない」課題だということの再確認をするものが主であったが、「死が怖い」「今死んでも後悔はない」「死は再出発である」といった記述も見られた。また、〈生きたとは〉と〈死とは〉の両方に現れたヴァリエーションは2にとどまり、どちらかの視点で死生観について言及していた。しかし、いずれも【気づき】へ向かうことはなく、一部が【願望】や【決意や意欲】に繋っていく以外は、すべて自己完結した述べられ方で、まるで達観したような客観的記述が目立った。

【気づき】は【願望】の次に記述の多いカテゴリーで22のヴァリエーションがあったが、上述した二つのカテゴリーほどまとまりがなく、実に多岐にわたった内容であったため、概念も〈何

かの契機や再確認」という括りにした。特に離れて暮らす家族や両親、友人など「他者への感謝や思い、恩返し気持ちは8あり、それが「親孝行したい」「家族や友人との時間を大切にしたい」という【願望】へと強く向かう契機となっていた。また、「目標の再確認」やこれまでの「生き方や未完の行為の再確認」は7あり、ナラティブに自分の生き方を回顧して、目標を明確化しているものもあった。さらに、この授業が「人生を見直す契機」となったとした記述が4、「自戒や反省」を述べたものは3であった。これらの【気づき】は「様々な感情の沸き起こりから生じたもの」であり、これこそが、デス・エデュケーション授業がもたらしたものであって、留学生たちの心情に大きく影響し、反応や変化を与えたと言えよう。そして、その【気づき】の多くは【願望】や【決意や意欲】へと向かっていたが、【願望】は〈自己中心的願望〉より〈他者中心的願望〉へ向かう傾向が強く、忙しい留学生活のせいで日頃ないがしろにしてしまっている身近な人への思いが沸き起こった結果と思われる。それは、【気づき】の中でも「不満」の記述にあった「今、したいことはたくさんあるけど、状況のためしないことが多いと思った」によく表れており、留学の目的を見失わないように、自分の感情を抑えて日々を送っていることが推測できる。

以上のことを見てもわかるように、【願望】【気づき】【死生観】は強さの違いはあれ、【決意や意欲】への方向性を持っている。その【決意や意欲】は12のヴァリエーションを持つが、単に目標達成だけを目指すものではなく、限られた命であるからこそ、「毎日やるべきことをやる」といった、「今をよりよく生きようとする気持ち」を生んでいた。また、留学生活に孤独や寂しさを抱えながらも、前向きに考え、「これからもっと頑張る」という励みに変えていたことも、この授業がもたらした影響の一つであると言える。

7. まとめ

これまではワーク後に自由記述を読むだけで、学生がどのような反応を見せ、どのような点に目を向けたかなどを漠然と眺めていたが、今回の分析により、学生の内面や背景が明らかになった。普段、課題に追われ、目の前のことだけに集中する日常の忙しさに紛れ、立ち止まることも振り返ることもなく過ごしている留学生たちにとって、この90分はこれまでの自分を見直し、反省し、ときには人に感謝し、初心に返ることのできる絶好の機会である。また、すべての学生ではないが、この授業をきっかけに、留学生生活をより有意義に後悔なく送ろうという意欲に燃える者も多い。筆者もこの分析によって、改めて留学生の置かれている環境や立場を再認識し、留学の目的を果たそうとする力強さを実感することができた。ただ、「余命半年」という命題に引きずられた記述も多く、自由記述の書き方をもう少し限定するべきかの検討が必要である。さらに、なかには通り一遍の深い思慮のない短絡的発想による記述も散見された。それは本来、1年かけて行うべきデス・エデュケーション授業を90分に凝縮していることが要因の一つであろう。したがって、今後はもう少し普段の授業の中に「生と死」を考えさせるような教材を導入し、年間を通して深い思考ができるようにカリキュラムを組む必要がある。ただし、いかなる教材やカリキュラムを組むにしても、常に念頭に置かなければいけないことがある。それは、竹田らが『生と死の現在』(2002: 145)の中で述べている以下の一文に示されている。

生きることの学習において学校が変わり、教師が変わること、とりわけ教師自身が生きることを学ぶひとりの人間に変わること。それが、学校におけるデス・エデュケーションを、真の意味で稔りあるものにするための不可欠の前提条件なのである。

これを肝に銘じ、今後も真摯にデス・エデュケーション授業に取り組んでいきたい。

今回、初めてSCATとSCQRMを用い、一人で質的データ分析を行ったが、その作業には膨大な時間がかかり、非常に困難を伴った。コーディングの際は、主観が入っているのではないかと、他の人ならば違う概念名が浮かぶのではないかと、何度も何度も自由記述を読み返して、その裏に隠されているものを読み解こうとした。そのため、最後まで分析が未熟なのではないかという疑念は残ったが、事象が〈概念〉、【カテゴリー】へと姿を変え、モデルとなって構造化されていく過程では、感覚的なものが実体になったような明快さを実感した。今後、研鑽を積んで質的データ分析をより説得力のあるものにしたい。また、初めての試みということもあって、今回は24名のみでデータで分析を行ったが、これまでに保存してある過去の自由記述についても同様の分析を行い、現在の記述との違いなどが見出せればと考えている。さらに、当初多いのではないかと考えていた宗教的思想が、はっきりと出ていた記述は1つだけであったが、他の学生がどのような宗教基盤の上に立って死生観を捉えているかも研究のテーマとしてみたい。加えて、機会があれば日本人学生にもデス・エデュケーション授業を行い、留学生との記述や概念の違いについても調査、研究していきたいと考えている。

引用・参考文献

- アルフォンス・デーケン (1993) NHK人間大学『死とどう向き合うか』日本放送出版協会
- アルフォンス・デーケン (1996)『死とどう向き合うか』日本放送出版協会
- アルフォンス・デーケン (2001)『生と死の教育』岩波書店
- 大谷尚 (2008a)「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCATの提案——着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』第54巻第号 (2007年度), pp. 27-44
- 大谷尚 (2008b)「質的研究とは何か——教育テクノロジー研究のいっそうの拡張をめざして——」『教育システム情報学会誌』vol. 25, No. 3, pp. 340-354
- 大谷尚 (2011)「SCAT: Steps for Coding and Theorization——明示の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法——」『日本感性工学論文誌』vol. 10, No. 3, pp. 155-160
- 大谷尚 (最終修正2012.12.9) SCATのページ <http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/>
- 小山真理 (2010)「『しろばんば』にみる少年期の死生観とデス・エデュケーション——現代におけるデス・エデュケーションへのヒント——」『文化女子大学紀要 人文・社会科学研究』18, pp. 115-129
- 木下康仁 (2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い——』弘文堂
- グレニス・ハワース, オリヴァー・リーマン編 荒木正純監訳 (2007)『死を考える事典』東洋書林
- 近藤均・酒井明夫他編著 (2002)『生命倫理事典』太陽出版

- 西條剛央 (2005) 『構造構成主義とは何か——次世代人間科学の原理——』 北大路書房
- 西條剛央 (2007) 『ライブ講義・質的研究とは何かSCQRMベーシック編——研究の着想からデータ収集、分析、モデル構築まで——』 新曜社
- 西條剛央 (2008) 『ライブ講義・質的研究とは何かSCQRMアドバンス編——研究発表から論文執筆、評価、新次元の研究法まで——』 新曜社
- 竹田純郎, 森秀樹, 伊坂青司編 (2002) 『生と死の現在 家庭・学校・地域のなかのデス・エデュケーション』 なかにしや出版
- 「特集 [死]」(1994) 『CREA 3月号』 文藝春秋, pp. 84-88
- 福土元春, 名郷直樹 (2011) 「指導医は医師臨床研修制度と帰属意識のない研修医を受け入れられていない——指導医講習会における指導医のニーズ調査から——」 『医学教育』 42(2), pp. 65-73

資料1 読解教材の本文全文と速読後のQAシート

速読 生きるということ —死を考えることは生を考えること—

〈語句〉 生を享ける 心構え 看取る 最期 瀕死

人間は若ければ若いほど、永遠の命があると錯覚しがちです。若い人に人生の計画をたてさせた場合、私は明日死ぬ、などと悲観的に考える人はごくまれでしょう。しかし、ドイツの有名な哲学者マルティン・ハイデガーは、人間を「死への存在」と定義しました。確かに私たちは、この世に生を享けた瞬間から、死に向かって歩み続けています。したがって、だれでもいつかは必ず、身近な人の死と自分の死に直面しなければなりません。

もちろん、私たちは、死そのものを前もって体験的に知ることはできません。なぜなら死んでからまたこの世に戻って、私たちに死後の世界をあれこれ教えてくれる人はいないからです。しかし、死を身近な問題としてとらえて死と生の意味を深く考えようとしたり、自分自身の死や愛する人の死にどう備えるかという心構えを学ぶことは、いつからでも始められます。それはまた、すべての人が生涯のそれぞれの時期に合わせるべき教育とも言えましょう。

もっとも、わざわざ死に対する教育などと言いつてなくても、20世紀の前半くらいまでは、ほとんどの人が自分の家で死を迎えていました。そのため、家族の一員の死を看取ることはどの家庭でも当然のことでしたし、それはまた自然に、残される人々に対する良き「死への準備教育(デス・エデュケーション)」の機会となっていたのです。

しかし最近では、大部分の人が病院でさまざまな機械に囲まれて、その管理のもとに最期の時を過ごします。医療技術の進歩は、科学の勝利として大いに歓迎すべきことなのですが、一面ではますます死を私たちのまわりから遠ざけて、死に対する心構えを学ぶ機会を失わせてしまったように思われます。

こうした事態への反省から、世界中でもっと死について知りたい、死を見つめて学びたいという動きが出てきました。それを専門的な学問として研究しようというのが死生学です。瀕死の状態に陥った患者の鼻や口、喉にまで管を通し、腕には点滴の注射針。病院ではよく目にする光景ですが、日本でもこのような家族の最期を看取りますと、これが果たして人間らしい死に方と言えるのだろうかという声が高まりました。そうした疑問や関心が重なって、「死への準備教育」というものが少しずつ注目されるようになってきています。

死を見つめることで、私たちは自分に与えられた時間が限られているという現実を再認識することができます。それは毎日どう生きていったらいいかと改めて考え直すことです。したがって、「死への準備教育」はそのまま「よりよく生きるための教育(ライフ・エデュケーション)」にほかならないとも言えるのです。

参考：NHK人間大学『死とどう向き合うか』アルフォンス・デーケン

速読 生きるということ

次の文を読んで○か×をつけなさい。

- 1 () 若ければ若いほど死を意識しないものだ。 2 () 誰でも必ず死に直面する。
 3 () 死は体験することができる。 4 () 死への準備教育は、今の時代必要ない。
 5 () 医療技術の進歩は、死を私たちから遠ざけた。

*覚えている人は答えてください。

- 6 「死への準備教育」を言い換えると何ですか。 _____ 教育

* QAは別紙で用意し、読み終わった人から、本文と引き換えに配布する。

資料2 聴解のワークシートの一部

生きるということ (聴解) 「死」について考えたことがありますか。

I. いろいろな職業のいろいろな年代の人(ただし、20歳以上)に、アンケート調査をしました。
 調査は次の4つの項目(①~④)について行いました。以下の項目について、あなたの考えを左の□
 に書いてください。

①あなたは「死ぬこと」が怖いですか。その理由を教えてください。

<p>「はい」の理由</p>	<p>「はい」と答えた人の割合……約_____</p> <p>理由：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ _____ の体験に対する恐怖 ・ _____ ことへの執着<small>しゅうちやく</small> ・ その他〈メモ〉
<p>「いいえ」の理由</p>	<p>「いいえ」と答えた人の割合……約_____</p> <p>理由：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ _____ から身近じゃない ・ 何度も _____ と思うから ・ みんな _____ から ・ よく _____ ことのほうが怖い ・ 毎日を _____ 生きていけば怖くない

- ②「死」について考えたことがありますか。それはどんな時ですか。
 ③「死」にそなえて、何か準備していることがありますか。それはどんなことですか。
 ④今まででいちばん印象に残った「死」を具体的に教えてください。
- II. 左の□に記入した後、テープを聞いて、右の_____に適当な言葉を書きなさい。

*実際にはスペースを広く取り、左にはテープを聴く前の自分の考えを、右にはテープを聴いてキーワードを書く。
 また、②以降の項目についても同様のタスクを設けてあり、B4サイズのシートとなっている。

資料3 私の人生計画表

あなたはこれからの人生をどのように生きていきたいですか。あなたの人生計画表を作ってください。何歳まで生きるかは自分で決めてください。卒業・就職・結婚・子育て・老後など、いろいろなできごとについても考えてみましょう。

I. 私の人生計画表

現在 () 歳

() 歳

*実際には上下のスペースが広く、学生は直線を埋めるように年齢と出来事を刻んでいく。

資料4 「もし余命半年だったら」という問いを投げかけた後のQA

では、先生の出した条件にしたがって、次のことについて考えてください。一人で考えてもいいし、隣の人と話してもいいです。

1. いちばん最初に何をしたいですか。
2. いちばん大切にしたいことは何ですか。
3. 何かを残したり、整理したりしますか。
4. 誰のために時間を使いますか。
5. 今の生活を変えますか。何か始めますか。今までと同じように生活しますか。

*実際には各質問別にスペースがあり、学生は一つ一つ記入していく。母語でも可とする。

資料5 自由記述

今日の授業の中で、「もしあと半年の命だったら」というのを考えました。そのとき、「したいことがたくさんある」と思った人は、まだまだやり残していることがある人です。また、「後悔していることがある」という人は、これから後悔しないように努力してください。もし、「両親や友人にあやまりたいことがある」なら今のうちにあやまっておきましょう。「死」を考えると、「生きるということ」を考えることです。この授業が今までの「自分の生き方」についてもう一度考え直すいいチャンスになったでしょうか。

今日の授業を通して、感じたこと、思ったことを自由に書いてください。

*実際には上記のインストラクションの下にB5サイズの罫線入りのスペースがある。

資料6 SCATの4ステップコーディングの例

	テキスト	(1)注目すべき語句	(2)テキスト中の 語句の言い換え	(3)左を説明するような テキスト外の概念	(4)前後・全体の文脈を考 慮したテーマ・概念	(5)疑問・課題
1-1	まだしたいことが多いけど、世界旅行も行きたいし両親と一緒に話したいし...	まだしたいことが多い	やり残しへの気づき	未完の行為への未練	未完の行為への未練・抑圧からの解放願望	
1-2	今、したいことはたくさんあるけど、状況のためしないことが多いと思った。	状況のためしない	拘束された状況による諦め	現状への欲求不満	現状への不満と抑圧の確認	
1-3	ひとり子で長く住まないと両親が大変だと思った。	ひとり子、両親が大変	親不孝をしている引け目	我を通した結果	大切な人への想いと引け目	
1-4	でも一番重要なことは私の時間が足りなかった。もちろん留学も私のための時間だが、今、私が本当にしたいことは日本の留学ではなく、世界のいろいろなことを行って経験するのだ。いつ死ぬかは分からないが絶対世界旅行はします。	時間が足りなかった、世界のいろいろなことを行って経験	不満の第一原因への気づきと本音の吐露・拘束された現状からの解放願望	時間の浪費感情と本音の再確認	時間不足という現状への不満・抑圧からの解放願望	留学を後悔しているのか？
2-1	日本に来てから、毎日日本語を使っている！しかも、書くとか、日本語が必ず生活の中の物になる。自分の感じたことを話したいとき、話し方よくわからなくて、日本語が嫌かった。でも、これは気持ち悪かっただけ時。日本語が上手になったら、たぶん仕事を探すこと簡単になるだろう。日本語を勉強する目的は、国へ帰る時、有名な会社に働いている。これは今の目標だ。	日本語が嫌かった、上手にならなかったら、仕事を探すこと簡単、有名な会社に	ナラティブな回顧による留学の目的の明確化	回顧と目的の再確認・具体的将来を思い描く	現状や立場の再確認・強い意志と目標達成への意欲	ナラティブに思い返すことで考えを整理できる
2-2	日本に長期の生活、家族の人を遠く離れて、寂しくなった。毎日家族の人に会いたいのので、いつでも電話を連絡する。日本でも話したことを話し、自分の考えと両親に相談するし、もう25歳になった、たくさん事が自分で決める。ときどき決断に迷った。	家族の人に会いたいの、たくさん事が自分で決める、決断に迷う	孤独と決断を強いられる状況	孤独との葛藤と自己成長成長への願望	孤独な留学生生活の回顧による反省と自己成長願望	
2-3	どんな事があっても、最後までがんばり抜いて、結果がいいとかよくないとか、後悔しない。未来に日本の生活することを思い出す時、満面の笑みを浮かべると思う。	最後までがんばり、後悔しない、未来に日本の生活することを思い	初志貫徹する意志と結果にこだわらない、明るい将来の想像	ゆるぎない信念と失敗を恐れない姿勢	ゆるぎない信念と決意による将来への意欲	
3-1	もし私はあと半年の命だったら、やりなおすことがないです。いまままで後悔していることはないです、/私はいつもしたい事をするからすべてにいまが半年か未来はかんげないだ。いままでの生方で生きています、	やりなおすことがない、後悔していることはない、いままでの生方で	現状に満足・何も変えない・達観	ぶれない自分の確信・平常心・達観	今まで通りの生き方をすすめるのみ・達観	達観ではなく諦観？
3-2	でもやりたいたい事はたくさんあります、まずは家族と一しよに旅行したいです、旅行はたのしいから、旅行の中でいろいろな見たいです、いろいろ見たあとでしたいにたいです、	やりたいたい事はたくさん、家族と一しよに、いろいろな見たあとでしたいにたい	やり残しへの気づきと短絡的願望	未完の行為への未練、未完の行為実現への意欲	未完の行為への未練と実現への願望、大切な人は誰かの確認・抑圧からの解放願望	達観しながら未練があるのは、ちゃんと向き合っていないから？
3-3	私は死の事は完全こくはないです、今死んでも大丈夫です、死は人びと絶対ありた、	今死んでも大丈夫、死は人びと絶対あり	人の運命に従う	人生に悔いなし・達観	避けられない死の受容・達観	
3-4	そして旅行の能中でしたにたいです、いろいろの写真とのこして。	写真とのこして	最期の願望と生きた証を残す	生きた証	最期の迎え方願望・生きた証を残す	自己顕示？

資料7 M-GTAの分析ワークシート例

概念名	自己中心的願望
定義	<p>今一番したいことを明確にする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まだしたいことが多いと思っただ。世界旅行も行きたいし両親と一緒に話したいし… ・でも一番重要なことは私の時間が足りなかった。もちろん留学も私のための時間だが、今、私が本当にしたいことは日本の留学ではなく、世界のいろいろなところを行って経験するのだ。いつ死ぬかは分からないが絶対世界旅行はします。 ・でもやりたい事はたくさんあります、まずは家族と一緒に旅行したいです、旅行はのしいから、旅行の中でいろいろな見たいです、いろいろな見たいです、したいです、 ・もう一度考えれば、あと、毎日楽しい生活を過ごきたい。自分を信じる、他人と自分を比較しない、好きなことをやる、もう一回、人生の経験をまじめに体験したい。 ・もし私があと半年の命だったら、最初は国に帰りたいと思う。なぜならというと、国には家族があつて、親友も国にいますから、自分のことを家族と親友に考えて、残りの時間に一緒に過ごしたいと思っっている。 ・そして、したいことがたくさんあつて、全部やってみる。例えば、世界旅行をしたり、バンジージャンプをしたりする。毎日後悔していい生活をしていっている。 ・さらに、死ぬ時には、絶対母にそばにいてくれて、安心のように死ぬのは一番ほしい、母が産んだ人として、死ぬ時にも母にいてももらいたい。 ・このように頑張って楽しく生きて家族にすばらしい記憶をつくりたいだ。そして、あと一ヶ月の命の時、一人で楽しく旅行する。こっそり誰も知らない状態でこのんびりで死ぬ。こういうようにすばらしい記憶を残して悲しいことも与えない命の終わるまで、人生は楽しい記憶があれば生きてると信じて。 ・そして、自分の人生は自分のために生きるんだ。よく、優しくないと言われたこともあつたけれども、それは自分にとつて一番の生き方だ。だとええ半年の命が残らなくても、変わらない。まずは北海道へ行きたい。そこに一か月遊んでいて、そしてヨーロッパと北欧へ行く。家に帰えつた時、だいたいまだ1か月があるから、ちゃんと親友だちにさよならを言って、親はきつとすぐく立っているけれど、私は泣き顔が好きじゃないから、親だちの顔がそんなに会いたくはないかもしれない。最後まで後悔しないように輝く生きたいだ。 ・いろいろなことに行動したら、今の国に帰り、家族と一緒に普通の日常をすこして、時間がある友人と話して遊びをして、世界のいろいろな食べ物を食べます。残りの半年、家族の中心、楽しく暮らします。 ・もしあと半年の命だったら、すぐ国へ帰ります。毎日家族と一緒に遊びたり、おいしい物を食べます。 ・まだ何か生き続ける方法を捜します。今までと同じように楽しみ生活します。 ・もしあと半年の命だったら、台湾に帰って、自分が好きなことをやって、例えば、人に手伝ったりボランティアをやったりする。一日中で家族とじゃべったり、家事もやったりする。 ・また、たくさんやりたいから、残りの時間は頑張つてやります。これから後悔しないことを向けて行く。 ・今回あと半年の命があつた、いちばん欲しいものは「レイズナー」と「セシル」がもらいたいです ・あと母国に帰ります。あとの時間に家族と一緒に生活すると思っます。人生の終点まで。 <p>そして旅行の途中でしにたいです、いろいろの写真のこして。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・留学という特殊な状況では帰国して家族のもとに戻りたいという願望は当然（家族のためというより自分の強い願望・普通の生活を送りたい） ・留学によって親元を離れていることがいかに不安に孤独かを垣間見たい ・深い思考もなくなった欲望を満たしたいという言動も散見 ・余命半年という命題にこだわった記述が多い ・余命半年という帰国が一番に思い浮かぶのは、留学が辛いことを意味する？ ・生きた証を遺りたいという人は2名にとどまった
理論的メモ	